

有田焼の貼箱から多様なパッケージに展開 デザイナーと連携した商品開発でデザイン経営を推進

有田焼の贈答品としての価値を高める貼箱メーカーとして創業。技術力によって受注範囲を全国に拡大し、海外有名菓子ブランドや大手アパレルブランドのパッケージも手がけている。下請け業態からの脱却を目指し、デザイナーと連携した自社商品開発にも取り組んでいる。2018年にグッドデザイン賞を受賞、2019年には貼箱製造時に大量に廃棄される端材を活用した商品開発に取り組み、京都デザイン賞2020を受賞。デザイン経営、SDGs経営の取組を進めている。

所在地	佐賀県西松浦郡有田町桑古場乙2369	設立	1956年
電話/FAX	0955-42-5131 / 0955-42-2001	資本金	1,000万円
URL	https://isshindo1956.com/	従業員数	15人
代表者	代表取締役 本土 大智		



手貼りへのこだわりと独自の貼箱開発で勝ち取る、国内外のハイブランドの信頼

貼箱は、厚く硬い芯材による箱と、貼紙を専用の糊で貼りあわせて製造する。機械化が進む貼箱製造業界のなかで、同社は職人による手作業での手貼りにこだわり、機械では対応不可能な厚みの芯材や貼紙にも対応。また、一般的な貼箱の形状だけでなく、デザイナーとの連携や技術研鑽を通じて、自社独自の貼箱形状の開発設計を重ねている。加えて複雑な箔押し等、高い特殊加工技術やデザイン性によって、国内外のハイブランドから注文を受けている。



手貼りによる貼箱の製造ライン

少量多品種製造のきめ細かさで取引先を拡大、端材活用の新商品が推進するSDGs

業界では機械化による大量生産が進み、小ロットの受注が困難になっている。同社は手貼りである特徴を生かし、小ロット受注や、特殊な加工を施す箱の製造等、顧客ニーズにきめ細やかに対応することで取引先を拡大してきた。取引に際して自社の強みを前面に出すことで、製品単価を下げない取り組みを推進している。箱の端材を活用した新商品開発も手がけることで、ロット対応のために必要以上に製造した箱や、端材の大量廃棄という業界の課題に対応する、SDGs経営に取り組んでいる。



京都デザイン賞2020に入選

将来の海外展開を見据え、環境への配慮と高いデザイン性で果敢に挑戦

2018年に将来の海外展開を見据え、オランダで開催されたMONOJAPANに出展。現地バイヤーから、長期にわたって使用可能な設計や、プラスチック製ではなく紙を原料にしている環境への配慮に対して、賞賛が相次いだ。同時に高いデザイン性についても評価され、米国向け高級車の販促パッケージボックスとしての採用が決定した。アジアにおいても、現地ニーズ調査のため展示会へ出展するなど、海外展開にも積極的に挑戦している。



MONOJAPANでものづくりを紹介